立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）
大学院生研究
２０１２年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院　現代心理学　研究科　臨床心理学　専攻		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
	現代心理学研究科臨床心理学専攻博士課程前期　2年	佐藤大海　印	
指導教員	所属･職名	氏　名	
	現代心理学部　教授	林もも子　印	
自然・人文・社会の別	自然　・　(人文)　・　社会	**個人・共同の別**	(個人)　・　共同　名
研究課題名	異性との互恵的アタッチメント関係の有無により養育に関する表象は異なるか		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
研究期間	２０１２年度		
研究経費	64768　千円（実績額又は執行額）		

研究の概要（200～300 字で記入、図･グラフ等は使用しないこと。）

互恵的アタッチメント関係尺度の作成を行った。二者関係において，アタッチメント行動と保護行動が共存している状態を互恵的アタッチメント関係と定義し，アタッチメント行動と保護行動に関する項目を 15 項目ずつ用意し，青年期の男女を対象に調査を行った。因子分析の結果を受けて，互恵的アタッチメント関係の定義とは異なる「近接願望」を削除し，「アタッチメント行動」と「保護行動」の，2 因子を後の分析に用いた。RQ を用いて，併存的妥当性を検討したところ，他者観得点と，2 つの下位尺度との間に，正の相関がみられた。しかし，アタッチメント・スタイルごとに下位尺度得点を比較したところ，仮説は支持されず，併存的妥当性に疑問が残る結果となった。

キーワード（研究内容をよく表しているものを３項目以内で記入。）

〔　互恵的アタッチメント関係　〕〔　保護行動　〕〔　アタッチメント行動　〕

研究成果の概要（図･グラフ等は使用しないこと。）

目的

Bowlby（1980）は，安心感を求めて，特定の対象に近接を求め，それを維持する行動を，アタッチメント行動と定義した。ところで，Ainsworth（1990）によると，成年期以降のアタッチメント関係は，互恵的（reciprocal）な関係であると言われている。この二者関係では，養育者と子どものように，保護の提供者（アタッチメント対象）と保護の受領者が，明確に分かれているわけではなく，状況に応じて交換される。アタッチメントの個人差を測定する方法は，多く報告されており，成人を対象にした測定尺度も報告されているが，成人のアタッチメント関係や親密な関係に見られる，互恵性という視点を含めた，測定尺度は作成されていない。そこで，本研究では，互恵性を考慮した，アタッチメント関係測定のための，尺度を作成することを目的とする。

方法

互恵的アタッチメント関係尺度の仮項目

まず予備面接を行い，その結果を参考にしながら，項目を作成した。また，アタッチメントに関する尺度や，保護に関する尺度などを参考にした。互恵的アタッチメント関係は，相手への保護行動とアタッチメント行動の両方が見られる状態であるので，安定したアタッチメント行動に関する部分（仮項目 15 項目）と，安定した保護行動に関する部分（仮項目 15 項目）を作成することとした。それぞれの質問に対して，どの程度当てはまるかを，5 件法で問うた。

なお，回答の際は，親密な対象を選択して回答をするように求めた。加えて，アタッチメント行動に関する部分では，親密な対象へ何かを相談したり，打ち明けたりする状況を想像するように求めた。反対に，保護行動に関する部分では，親密な対象から何かを相談されたり，サポートを求められたりする状況を想像させた。

事前に，異性の対象の想定させる質問紙と，同性の対象を想定させる質問紙を用意し，ランダムに，協力者に配布した。先述の年齢や性別に加えて，想定した親密な対象との間柄について問う，質問を設けた。並存的妥当性の検討は，Bartholomew & Holowitz（1990），加藤（1998）による関係尺度（RQ）で行った。

さらに，サポートなどの対人関係に関する質問であるため，社会的に望ましい回答をする協力者がいる可能性が考えられた。そこで，MMPI の L 尺度を用いて，6 項目以上，「いいえ」を選択した協力者は，分析から除外することとした。

協力者

2012 年 5 月から 8 月にかけて，関東圏内の大学の講義時間や，サークルのミーティング時間に，質問紙を実施した。また，研究者の知人を通じて，郵送法で，質問紙を実施した。L 尺度の分析除外基準を満たしていたり，回答に不備があったりしたものを除いた，最終的な有効回答数は，201 名であった。男女の内訳は，男性 70 名，女性 131 名であった。協力者の平均年齢は，協力者全体で 19.7 歳（SD=1.6）であり，年齢の幅は 18 歳から 27 歳であった。性別ごとでは，男性の平均年齢が 19.8 歳（SD=1.5）であり，年齢の幅は 18 歳から 25 歳であった。また，女性では，平均年齢は 19.7 歳（SD=1.6）であり，年齢の幅は 18 歳から 27 歳であった。

なお，親密な対象として，異性の人物を想定させたものが 94 部で，同性を想定させたものが 107 部であった。親密な対象との間柄としては，恋人を選択した人が 35 名，友人が 133 名，家族が 30 名であった。残りの，3 名が，その他の対象であった。
& Bartholomew，1994）。

研究成果の概要　つづき

結果

因子分析に先立ち，床効果と天井効果が見られている項目を除外した，22 項目に対して，KMO を算出したところ，KMO は.892 であった。また，Bartlett の球面性の検定を行った結果，p<.001 となり，因子分析の適用が妥当であると考えられた。

最終的な因子分析（最尤法・直接オブリミン回転）では，3 因子が抽出された。固有値は，第 1 因子から，7.972，1.911，1.251，1.018，0.732 であり，累積寄与率は第 1 因子から，44.290，54.907，61.885，67.511，71.604，75.365 であった。

第 1 因子は，「私がつらいときには，X さんに一緒にいてもらおうとする」や「私が困っているときや，悩んでいるときは，X さんにそばにいてもらおうとする」，「私が不安なときには X さんに慰めてもらおうとする」の 3 項目からなる因子で，「近接願望」と命名した。α=.93 であった。

第 2 因子は，「私は X さんと自分の抱えている不安や問題について話し合う」や「私は，X さんに気軽に相談をする」，「私は X さんに自分の不安や動揺を話さない（逆転）」などの 7 項目からなる因子で，「アタッチメント行動」と命名した。また，α=.88 であった。

第 3 因子は，「私は X さんの悩みや困りごとを，自分の生活を犠牲にしても解決しようとする」や「私は X さんが慰めてほしいと感じているときは，進んで慰める」，「私は X さんの立場に立って，X さんにアドバイスをする」などの 5 項目からなる因子で，「保護行動」と命名した。また，α=.77 であった。

併存的妥当性の検討

次に，RQ を用いて，併存的妥当性の検討を行った。RQ から，自己観得点と他者観得点を算出した（Griffin & Bartholomew，1994）。自己観得点と他者観得点と，互恵的アタッチメント関係尺度の相関を求めたところ，「アタッチメント行動得点は，他者観得点と有意な正の相関がみられ（r=.27），保護行動得点も他者観得点と有意な正の相関がみられた（r=.15）。また，合計得点も他者観得点と有意な正の相関関係にあった（r=.26）。以上の結果から，おおむね併存的妥当性が確認されたと考えられる。

しかし，本来であれば，安定型のアタッチメント・スタイルを持つ人が，それ以外の不安定なスタイルの人々に比べて，互恵的アタッチメント関係尺度の各得点が高くなるはずであったが，本研究では，仮説が支持されなかった。

研究発表（研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。）

①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）
③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

本研究の一部は，2013 年の立教大学臨床心理学研究に投稿を予定している。そのために，今回得られた結果に加えて，Feeney の成人版安心感の輪の観点から，「探索行動」と「探索行動の支持」という因子を追加する予定である。

また，関連研究として，佐藤（2012）では，親密さへの恐れと子どもへの応答性やイメージとの関連を検討した。その研究の中で，Feeney の理論を含めた，互恵的アタッチメント関係尺度をもとに，関係の互恵性という観点を含めて，親密さについて報告する予定である。